

# 古代宮都と周辺景観の保全

— 難波京と古代大坂平野を事例として —

木原克司

- I. はじめに
- II. 古代大坂の自然景観
- III. 古代大坂北部の歴史的景観と保全
- IV. 難波京および京周辺部の歴史的景観と保全
- V. 古代大坂南部の歴史的景観と保全
- VI. おわりに

今回の報告では、梶原・市原や日下の復原対象から除外されていた7~8世紀の大坂平野を対象として、自然景観や歴史的景観をとりあげる。それらの大部分は、今日では地表景観から姿を消しているが、現在においてもその痕跡を留めるものや広域にわたる用地の買い上げ等による古代歴史的景観の復原・整備の試みも認められる。

## I. はじめに

大阪平野西部に位置する上町丘陵を中心とする古代大坂平野の歴史的景観の復原に関する研究は、戦前における天坊幸彦、竹山真次などの研究<sup>1)</sup>を端緒とするが、昭和29年以降継続的に実施されて来た難波宮の発掘調査により、上町丘陵北部で前・後2時期の難波宮中心部の存在が明らかにされて以来、筆者自身を含めて岸俊男、藤岡謙二郎、梶山彦太郎、市原実、沢村仁、服部昌之、足利健亮、長山雅一、日下雅義、千田稔、金田章裕などの諸氏により難波京の条坊復原をはじめとして、港津・郡衙・古道・国境・条里・開発や古環境などを対象として研究が展開されてきた<sup>2)</sup>。中でも先史・古代における大坂平野の古地理図(縄文時代前期~古墳時代中期)を作成した梶山・市原の業績や弥生時代および6~7世紀の景観復原を試みた日下の研究は高く評価できる。

## II. 古代大坂の自然景観

図1は、上町丘陵や河内平野でのこれまでの考古学的な発掘調査の資料、昭和46年撮影の2万分の1空中写真やボーリング資料<sup>3)</sup>をもとに、現大阪市域を中心として7~8世紀の微地形を復原したものである。微地形の復原にあたっては、基本的には各地域における遺跡の検出高度に昭和10年から昭和44年の間の人工的な地盤沈下量(大阪東南部1.2m、大阪東部1.4m、大阪西部港湾地域1.1~2.4m、大阪北部0.95mなど)および自然沈下量(年間0.5mm以下)を加算して7~8世紀の生活面高度を復原した。なお、最も低い位置で検出される当該期の遺跡の生活面高度から推定される当時の大阪湾の海面高度は、干満潮を含めてT.P. マイナス1.3m~T.P. マイナス0.3mとなる。すなわち、満潮時でも現在の東京湾平均海面より30cm低かったことになる。復原方法の詳細については拙稿<sup>4)</sup>を参照されたい。

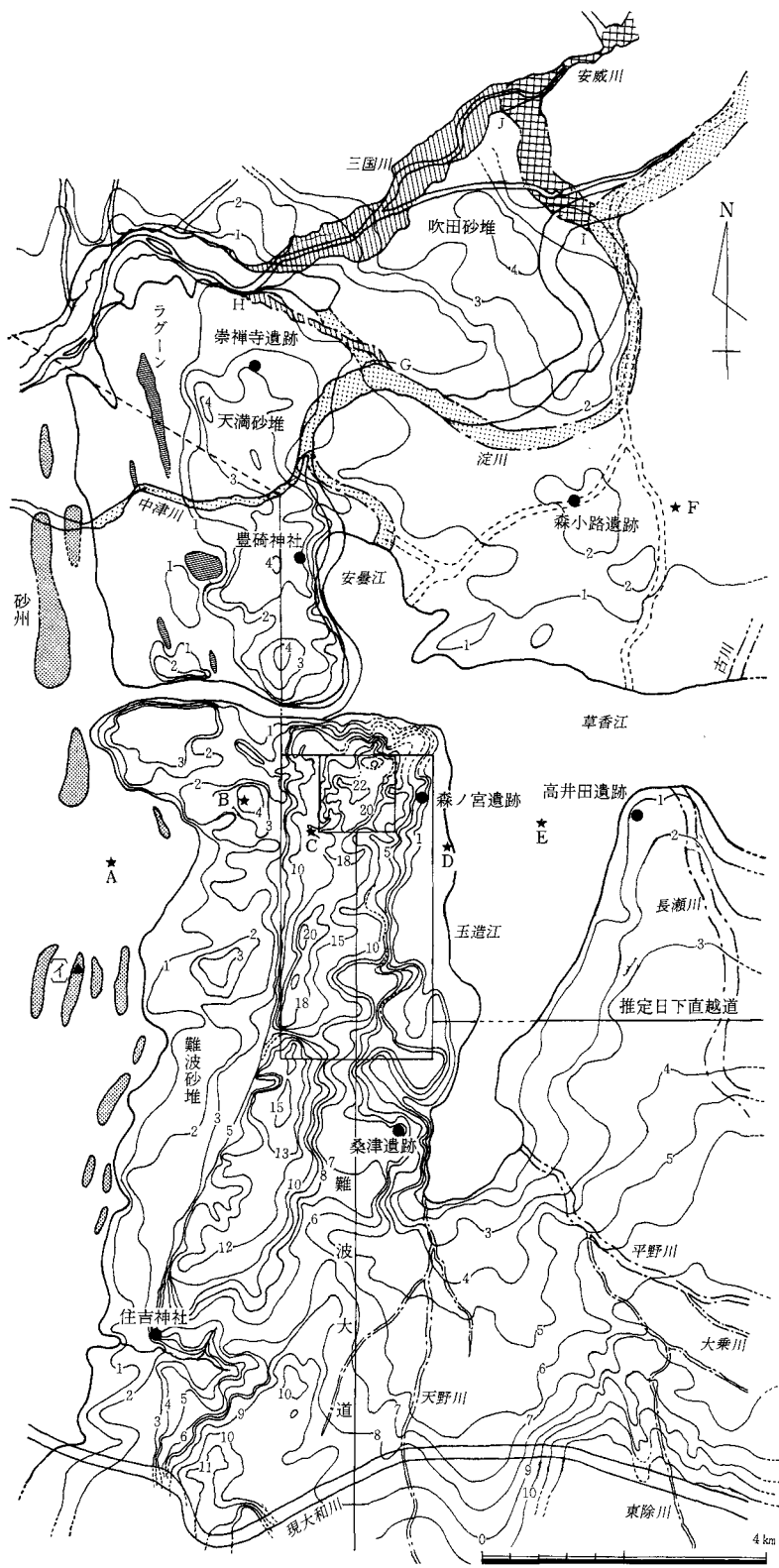


図1 古代大坂の自然景観  
 (等高線の数値はT.P.値を示す。)

本図から読み取れる7～8世紀の大坂の自然景観の概要は以下に述べるとおりである。

①標高25mの上町丘陵が南から北に向けて岬状に突出する。

②上町丘陵の北および西には標高4m程度の天満砂堆・難波砂堆が形成され、両者の西方の海岸部には南北方向に砂洲が並列する。西方砂洲上の①では、明治13年2月20日付けの朝日新聞雑報によると「今木新田掘割に懲役人を数名使役して土砂を運送せしめらるゝが土砂中より色々古器を掘出す」とあり、かつて砂洲上に集落が営まれた可能性も考えられる。また、北の千里丘陵からは南東に向けて吹田砂堆が突出する。

③上町丘陵の東方には、『日本書紀』神武天皇即位前紀や万葉集に登場する草香江が生駒山麓まで広がる。

④草香江の北西には、後述する東大寺の荘園である新羅江庄の四至（東安曇江、西百姓家、南堀江、北松原）に見える安曇江<sup>5)</sup>があり、南西には小野小町の「湊入りの玉つくりえにこぐ船の音こそたてね君をこふれぞ」（『新勅撰集』）などに登場する玉造江が位置する。

⑤草香江には、北から淀川や淀川の一分流である古川が流入し、南からは旧大和川水系の長瀬川・平野川や現河内長野から派生する天野川が注ぐ。

⑥淀川本流<sup>6)</sup>は、摂津市鳥飼付近から南西に流れ、吹田砂堆に突き当たり南流し、砂堆の裾に沿って弧状に曲がりつつ天満砂堆まで進み、そこから方向を南に転じ低地部を蛇行して安曇江に注ぐ。また、毛馬町付近で中津川を分岐する。図上網掛の淀川本流から分岐し破線で示した淀川ルートは、日下雅義による6・7世紀の淀川であるが、草香江に向かって南流する流路については昭和46年撮影の空中写真でも判読し得るが、途中から西に向かう旧河道は空中写真やボーリング資料でも判読できない。さらに、そのルートは弥生時代

以来安定した集落を営む森小路遺跡の立地する微高地を横断することから考えても無理がある。

⑦大坂湾岸には、『日本後紀』弘仁3年(812)6月3日条の「使を遣わして摂津国の長柄橋を造らしむ」や『文徳天皇実録』仁寿3年(853)10月11日条「摂津国奏言す。長柄・三国の両河、頃年橋梁断絶し、人馬通らず。請ふらくは、堀江川に准じて、二隻の船を置き、以て済渡を通ぜんことを。これを許す」の記事から9世紀頃に三国川（神崎川）、長柄川（中津川）と堀江川の3本の河川が平行して存在したことがわかる。そのうち、堀江川は『日本書紀』仁徳11年冬10月の「宮の北の郊原を掘りて、南の水を引きて西の海に入る、因りて其の水を名付けて堀江といふ」に見える堀江と考えられており、現土佐堀川・堂島川にあたる。

これらの自然景観のほとんどは都市化の影響を受けてビルや住宅の下に埋没し、堀江川を除いて今日ではその面影すら捉えきれない。

### Ⅲ. 古代大坂北部の歴史的景観と保全

南方から天満砂堆が北に向かって形成され、吹田砂堆が千里丘陵から南東方向に延びて来るにしたがって、河内平野内の水の大坂湾への唯一の排水ルートであった吹田砂堆と天満砂堆間の狭隘な水路が徐々に埋没し、5世紀以降河内平野では滞水現象が顕著となり、洪水が頻発する。こうした状況は、『日本書紀』等の記録からも読み取れる。それ故に仁徳11年に上町丘陵北側の天満砂堆を掘削する必要性が生じたのである。7～8世紀の天満砂堆は現在の淀川区の西三国付近まで延び、北側には幅500～700mの狭い入江が残されていたようである。この入江こそかつての河内平野の水の排水ルートの名残であり、ここに三国川（神崎川）が北東方向から流れ込んでいた。

こうした頻発する洪水に対応して、8世紀に淀川下流の当該地域を中心として、治水・利水に関連する水利事業が展開される。その一つは『行基年譜』<sup>7)</sup>の天平13年(741)記にみられる摂津国嶋下郡高瀬里の高瀬大橋、摂津国西成郡の長柄・中河・堀江の各河川への三カ所の橋の架橋、河内国茨田郡古林里の古林溝の開削、摂津国嶋下郡次田里の次田堀川や河内国茨田郡大庭里の大庭堀川の開削などの諸事業である。もう一つは『続日本紀』延暦4年(785)正月14日条の「使いを遣わし、摂津国神下、梓江、鯨生野を掘りて、三国川に通ぜしむ」にみられる三国川への導水工事である。

このうち次田堀川については、服部昌之が明治18年測量の仮製2万分の1地形図や17世紀中頃作成と伝えられる摂津河内大絵図をもとに東淀川区菅原から東淡路・淡路・西淡路にかけて存在した二重堤逆川に比定<sup>8)</sup>している。その位置は図1のG-Hに網掛で示すように空中写真からも判読でき、ボーリング資料からも砂礫層の上に厚さ1~1.3mの粘土の堆積が確認される。『行基年譜』に示された長さ800丈(約2.1km)、幅20丈(約60m)、深さ6尺(約1.8m)の規模ともほぼ合致し間違いないと考えられる。

また、延暦4年の三国川への導水工事跡について天坊幸彦は、淀川の洪水防止のため江口付近から井高野・別府間を掘削し、三国川へ連絡させたとする<sup>9)</sup>。この開削工事跡は図1のI-J間に該当し、昭和46年の空中写真や明治18年の仮製2万分の1地形図からも明確に確認できる。

しかし、これらの歴史的な人工運河についても埋没遺構としては保存されてはいるものの、大阪都市域の拡大につれて住宅に覆われ、今日では空中写真からも判読が困難となってきた。

#### IV. 難波京および京周辺部の歴史的景観と保全

難波に都が造営されたことは、『日本書紀』孝徳天皇大化元年(645)冬12月条の「都を難波長柄豊碕に遷す」、同白雉元年(650)冬10月条の「宮の堺の標を立つ」、同白雉3年(652)秋9月条の「宮造ること已に訖りぬ。其の宮殿の状、殫に論ふべからず」、天武8年(679)11月条の「難波に羅城を築く」、天武12年(683)12月条の「凡そ都城・宮室、一處に非ず、必ず兩參造らむ。故、先ず難波に都つくらむと欲ふ」、『続日本紀』聖武天皇神亀3年(726)冬10月条の「藤原宇合を知造難波宮事とす」や同天平16年(744)2月条の「今、難波宮を以て定めて皇都とす」などの記録からも明らかである。昭和29年から継続されている発掘調査の成果を通して、孝徳期と天武期の難波宮が合わせて前期難波宮と呼称され、奈良時代の聖武期の難波宮が後期難波宮と呼称されている。

一方、難波宮を核とする難波京の成立に関しては、1970年代から1980年代にかけては孝徳天皇の長柄豊碕宮の段階に既に条坊制地割による難波京が成立していたとする見解が主流を占めていた。1990年の宮城南部での前期難波宮の朱雀門の発見以降、宮周辺部や推定京内での新たな発掘調査の成果を含めた研究の進展に伴い、近年では孝徳天皇の長柄豊碕宮の時期には一定規模の宮域を設けただけであり、京の造営着手は長柄豊碕宮の時期の中心施設を踏襲し難波宮の造営を進めた天武天皇の時期まで下るという考え方が強くなって来ている。

大阪市の中心部に位置する難波京の場合、藤原京や平城京のように条坊制による道路等の発見は未だないが、天王寺区細工谷から寺田町付近にかけて南北に痕跡を留める朱雀大路跡や四天王寺周辺に遺存する900尺(約265m)四方の地割の存在、推定京内での多

くの正方位の建物関連遺構や井戸などの検出から、天武朝および聖武朝に条坊制による京が存在したことはほぼ間違いないと考えられる。

以下、これまでの難波宮中心部の検出遺構をもとにした長柄豊碓宮・天武朝難波宮の宮域の推定、宮中心部の保存運動を含めた歴史的景観の保全、想定される難波京と遺存地割の現状、想定京城周辺の歴史的景観の4点について述べる。

(1) 長柄豊碓宮および天武朝難波宮の宮域

長柄豊碓宮は、孝徳天皇白雉元年（650）冬10月から白雉3年（652）秋9月にかけて造営された宮殿であり、京を伴わない宮のみの構造と考えられる。その構造は、近年の発掘調査の成果から推定すると、一本柱塀で囲まれた南北700～900m、東西600m程度の長方

形の宮域（図2のI-J-M-NあるいはI-J-K-L）内に前期難波宮の内裏・朝堂院およびいくらかの官衙施設（官衙）を、そして周辺の平坦部に住宅を配置したものと考えられる。北西隅で検出された水利施設は、7世紀中頃過ぎにはその機能を失ったと報告されており<sup>10</sup>、長柄豊碓宮に付属した施設と考えられる。また、図2に黒丸で示した前期難波宮関係の建物は、内裏・朝堂院などの中枢建物群のほとんどが焼けているにもかかわらず、火災痕跡は認められない。こうした建物群もおそらくはこの時期の施設であり、天武朝の難波京造営時に宮域の変更に伴って、先の宮域を画する一本柱塀を含めて撤去されたと考えられるべきであろう。なお、当該期の都の構造は、上記の宮域周辺部の平坦地に官衙や宅地を配置したものと推定される。

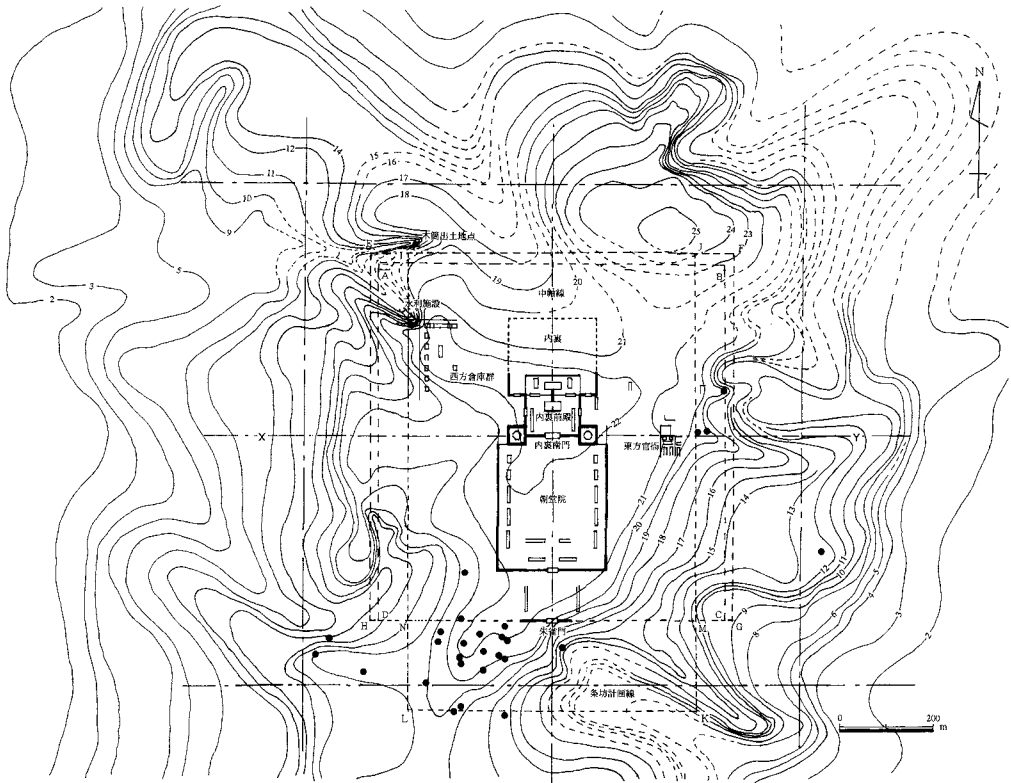


図2 長柄豊碓宮および前期難波宮城の規模（ABCD：中尾芳治説，EFGH：木原克司説）  
（等高線の数値はT.P.値を示す。）

前期難波宮の宮域については、朱雀門の位置が確定されたこと、四天王寺周辺の遺存条坊地割をもとに計測した結果、宮を南北に2等分する線が図2のX-Yラインにあたることから、正方形の宮域を想定するならば、図2にE-F-G-Hで示した約774m四方の宮域となる。当時使用されたと考えられる測地尺（1大尺＝約35.2cm）で換算するとほぼ2200大尺となる<sup>11)</sup>。これは、宮の南北2等分線の位置を内裏南門より南の八角殿院南回廊として推定した中尾芳治説<sup>12)</sup>（方約740m、図2のA-B-C-D）より少し大きな宮域である。いずれにしても、これまで藤原宮や平城宮に合わせて想定されていた1km四方より一回り小さな宮域となる。

ただ、このように復原すると、宮域を画する大垣は、図2に示した条坊計画線から約140m（400大尺）内側に設定されたことになる。その数値は、藤原宮（200～250大尺）や平城宮（60～70大尺）<sup>13)</sup>と比較しても大きく、宮域と宮域の四周の大路との間に広い空間地が存在することになる。しかし、難波の場合、図2からも判るように宮域の周囲には谷状の地形がめぐっており、平坦地に造営された藤原や平城宮との地形条件の相違を考慮すれば理解可能かと思える。

## (2) 難波京と京内に遺存する歴史的景観

難波京については、既に述べたように、中心部の宮殿や諸官衙施設を除いて、条坊地割の実態を具体的に復原し得るような道路跡等の検出は未だない。しかし、宮の東・西・南の上町丘陵上からは、7世紀後半から8世紀代にかけての正南北方位を示す建物・溝・井戸など京内施設に関連する遺構が広範囲にわたって検出されており、一定の範囲に条坊地割が施行された可能性が強い。

難波京復原の際に指標となるのは、当時の微地形、四天王寺周辺に残る条坊地割の痕跡と考えられている900尺（約265m）の地割、四天王寺南東に遺存する字十六の小字と『続

日本紀』孝謙天皇天平勝宝5年（753）9月条の摂津国御津村に被害を与えた高潮記事である。

問題となる高潮記事の内容は、「摂津の御津村に南風大いに吹き、潮水暴かに溢れて、廬舎一百十余区を壊損し、百姓五百六十余人を漂没す。並びに賑恤を加ふ。仍て海浜に居む民を迫して、京中の空きたる地に遷し置く。」である。筆者はかつて、近年の台風による大阪湾の高潮の規模（T.P.2.5～T.P.3.8m）から当時2～3mの高さの高潮を伴った台風が御津村（図3の〔ア〕）を襲ったと想定した<sup>14)</sup>。第1章で述べた当時の満潮時の海面高度（T.P. マイナス 0.3m）を基に図3の標高2mの等高線付近まで浸水等の被害が及んだと推定すると、京の西限は標高2mより東に位置することになる。東限は微地形から見て図3の玉造江までに納まると考えられ、京の東西幅は1坊を900尺四方とすると8坊となる。

京の南北長については、従来から京の南端を考える上で鍵となっていた図3の〔イ〕の茶臼山古墳が、最近の調査で古墳でない可能性が強くなった<sup>15)</sup>ことと、900尺地割が四天王寺の南にも広がり、図3の〔ウ〕付近に字十六という小字が遺存することから考えると16条となる。ただ、右京の北側に接して条坊地割の存在を示す東西溝等が検出されているため、積山洋が最近指摘しているように<sup>16)</sup>、平城京と同じように右京の北に1坊分の北辺坊が存在した可能性もある。こうした京城の造営開始の時期は推定京内でのこれまでの発掘調査の成果を総合すると、天武8年（679）の羅城築城あるいは同12年の複都制の詔の頃と考えられる。

こうした推定京域内には、右京南部に推古天皇元年（593）に建立されたと伝えられる国指定史跡の四天王寺<sup>17)</sup>が現存し、左京南部の朱雀大路に近く大阪市顕彰史跡の摂津国分寺<sup>18)</sup>がある。また、京城左京南部の外に

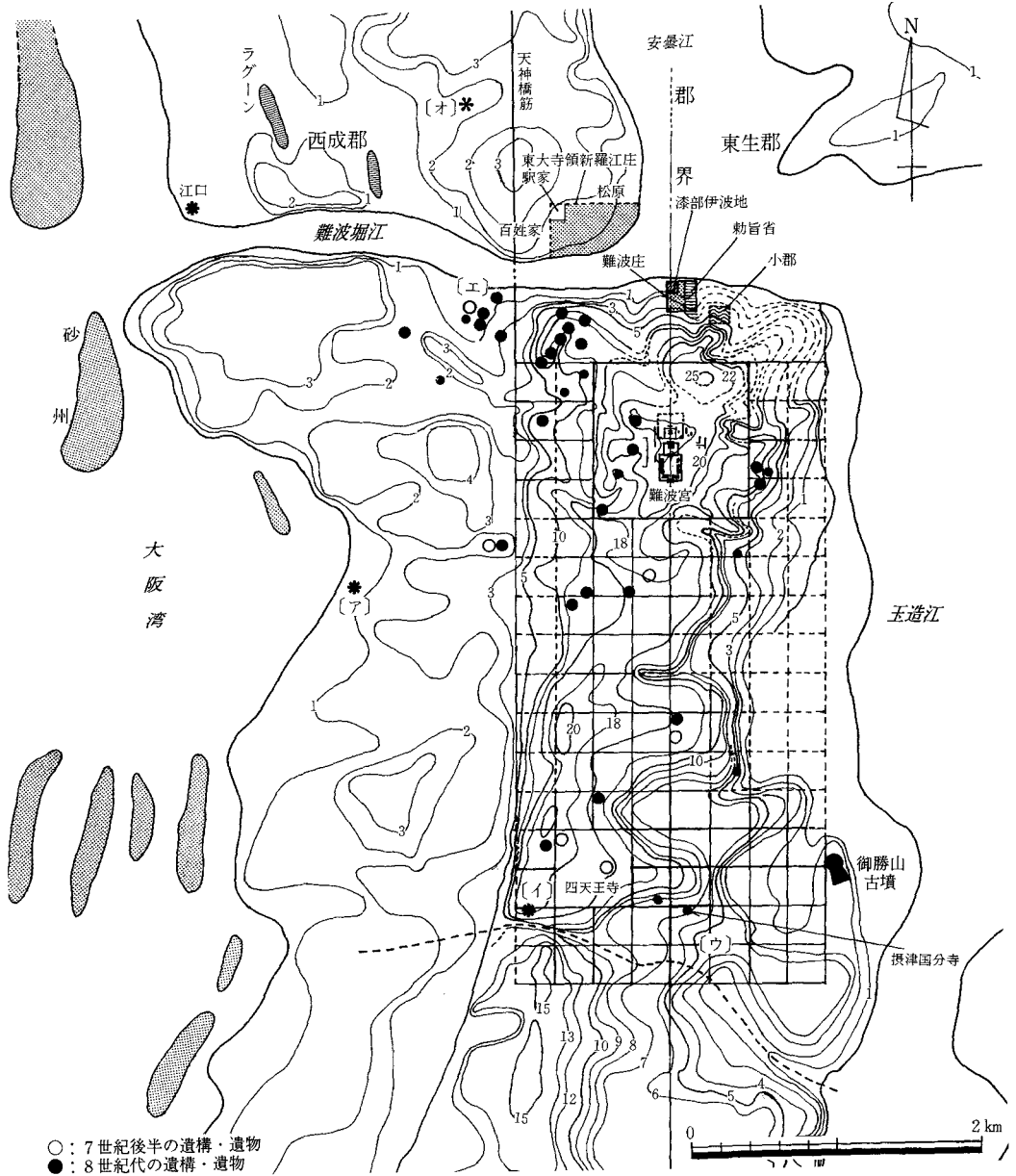


図3 難波京および京周辺の歴史的景観  
(等高線の数値はT.P.値を示す。)

は大阪府史跡の5世紀前半の前方後円墳である御勝山古墳がある。現在、前方部は削平され勝山通りと公園になっており、後円部とその西側に周濠の名残をとどめている。しかし、前方部も発掘調査によって、葺石、周濠

の存在が確認されており、地表下に基底部分が遺存することが明らかにされている。この古墳の存在は、京内に墓を残さないという都城造営の基本理念から難波京東限想定の大きな根拠の1つでもある。

また、四天王寺の東や南東には、朱雀大路跡を含めて、図3に太線で示したように難波京条坊地割の痕跡が現存道路として残っている。特に、四天王寺の東門から東に延びる道路は、発掘調査によって明らかにされた東門の設置年代（白鳳期）とからめて、条坊道路の施行年代を7世紀後半と考える根拠の1つとなっている。

さらに、難波京西限の西京極大路は、現在の松屋町筋および天神橋筋に一致し、大阪市の南北の幹線道路の1つとなっている。なかでも延長2.5kmの天神橋筋は大阪でも有数の商店街を形成し、天満砂堆の最も高い位置を南北に貫いている。足利健亮は、この道を『日本書紀』大化3年（647）10月条に見える孝徳天皇の有馬温泉行幸のルートと推定し、7～8世紀の難波の計画古道の1つとして位置づけている<sup>19)</sup>。

難波京が終焉を向かえた延暦3年（784）に、都は平城京から長岡京に遷都されるが、ちょうどこの頃河内平野の洪水対策の1つとして和気清麻呂による河内川の開削工事が計画される。『続日本紀』延暦7年（788）3月16日条にある「河内・摂津両国の堺に川を掘り堤を築き、荒墓の南より河内川を導きて、西の海に通さむ。（以下、略）」がそれである。ここに言う荒墓とは御勝山古墳と理解すべきであり、23万人の労働力を投入した開削工事であったが未完成に終る。図3の茶白山〔イ〕の南に上町丘陵を東西に立ち割ったような地形が認められ、ボーリング資料からも人工的な工事跡と判断できる。その跡は、図3に太い破線で示したルートであり、現在でも丘陵上に幅50m前後の帯状の凹地が確認でき、丘陵の東部は浅い谷状の窪地となっている。茶白山の南にある河底池は開削工事の痕跡とみられる。

### (3) 難波京周辺の歴史的景観

古代の難波津の位置比定に関する考察は、古くから天坊幸彦<sup>20)</sup>をはじめ多くの先学に

より試みられて来た。これまでの諸説を分類すると、その比定地は大きく以下の5地域に分かれる。①中央区三ツ寺付近、②中央区天満橋付近、③中央区東横堀川の高麗橋付近、④上町丘陵東側の入江（玉造江）付近、⑤難波の堀江を含む周辺一帯である。結論から言えばいずれの説も決定的な根拠はなく、その比定地は完全に都市化され、今日ではその面影すら窺えない。津の位置比定は、船着場や埋没船の発見がないかぎり困難であるが、ここでは7・8世紀の微地形図や近年の発掘調査資料を用いて既往の比定地の中で最も注目を集めた千田稔と日下雅義の説に検討を加えつつ、私見を述べておきたい。

千田は『行基年譜』記載の大福院と現三津寺（中央区心斎橋筋2丁目）との関連から、御津・難波津と呼称された場所を三津寺付近とし、『続日本紀』天平勝宝5年9月条に見える御津村＝難波津を図3の〔ア〕付近に比定した。しかし、大坂湾に面するその位置は港として一見適したように見えるが、汀線付近の当時の水深は1～2mときわめて浅く砂州の発達がない反面、波浪の影響をまともに受ける地点である。御津村が天平勝宝5年に高潮に襲われ大きな被害を被ったのも、砂堆地域の湾奥に位置し、沖合に防波堤としての役割を果たした砂州が存在しないという条件が影響したとも考えられる。いずれにしても、こうした大坂湾沿いの地域は、砂堆や砂州の発達に伴う浅水化は免れず、港の立地に適した場所とは言えない。

一方、日下は現在の東横堀川に沿って南北方向の水域（ラグーン）を復原し、難波堀江から南に入り込んだ図3の〔エ〕高麗橋付近に難波津を想定した。しかし、7～8世紀の微地形復原では、この付近には上町丘陵から派生する南東から北西に向かう浅い谷状の地形が見られる。さらに難波堀江に面する谷口付近ではT.P.0.2m～0.8mの砂層上や砂層内から6世紀～8世紀の遺構・遺物が出土してお



り、日下が指摘するようなラグーンの存在は想定し得ない。

筆者自身は『日本書紀』等の史料に見られる難波津は特定の港を指すのではなく、図3に示した上町丘陵北部の大坂湾岸一帯を指して使用された用語と解しており、難波における船着き場としての港の位置は、波浪の穏やかな内湾に位置し、上町丘陵という天然の風除けを西に控え、木造船にとって好都合なフナムシの棲息しない淡水域という好条件を具えた玉造江の西岸（現在の森の宮から玉造付近）と考えている。それ故に、『日本書紀』にも記述されているように、船で来朝した中国・朝鮮の使節団に対して、日本側は飾り船を仕立てて図3に示した難波堀江河口の江口に出迎え、内湾の港に誘導する必要があった。

難波京北側の難波堀江を挟んで8世紀頃に新羅江庄と難波庄という東大寺の荘園が存在したことは、大谷治孝の研究<sup>21)</sup>により明らかにされている。大谷は『大日本古文書家わけ第十八、東大寺文書之三』所収の「摂津国家地売買公驗案」と延暦2年6月17日の「太政官牒」の分析を通して難波における東大寺の土地の入手とその後の転売過程を考察したものであるが、筆者作成の微地形図を用いて松原弘宣や柴原永遠男も具体的な位置比定を試みている<sup>22)</sup>。図3の難波京の北方に示したのがそれである。しかし、南の難波庄と小郡の位置は大坂城内濠から北外濠で破壊され、北側の新羅江庄も大蔵省造幣局や市街地となっている。

#### (4) 難波宮中心部の保存と活用

大阪の中心部に位置しながら難波宮跡が開発から守られて来た大きな要因は、太平洋戦争による敗戦まで歩兵第八連隊の軍用地として活用されて来たことである。戦後昭和29年から中心部の発掘調査が開始され、昭和36年になってようやく古代の難波宮であることが学会でも承認されることになった。しかし、

不運なことにその直後から都市再開発の波にさらされることになった。

昭和37年に前年の発掘調査でその所在が発見された奈良時代の大極殿跡に近畿財務局が第二合同庁舎建設を計画した。これ以降、昭和40年の大阪府立第二整肢学園建設、昭和43年の大阪市立教育青少年センター建設、昭和45年の阪神高速道路東大阪線建設、昭和62年の旧大阪市中央体育館地域の開発など、次々と登場した開発計画に対して、研究者・市民による5回の保存運動が展開されてきた。特に、阪神高速道路については、橋脚建設による難波宮中心遺構の破壊を避けることの他、国の特別史跡である大坂城との間を横断することによる歴史景観の阻害などを理由に、高架道路から平面道路に大きく計画変更された。

こうした保存運動により完全には開発を阻止できなかったものの、昭和39年に始まる国による第1次史跡指定（17500m<sup>2</sup>）以来5次にわたる史跡指定により、今日では図4に示すように難波宮中心部の約12万m<sup>2</sup>が国史跡となっている。また、昭和46年から大阪市による史跡指定地の環境整備事業が開始され、昭和51年には奈良時代の大極殿を中心とする地域の整備が完成し、難波宮跡公園として一般公開され、その後も整備事業が継続されている。

中尾芳治は、森の宮遺跡、難波宮跡、大坂城跡を史跡公園として広域的に保存・整備するとともに、既に実施されている史跡連絡遊歩道（歴史の散歩道）で結びつけることにより一大史跡公園を出現させるべきという主旨の「大阪アクトポリス計画」を提唱している<sup>23)</sup>。この提案に呼応してか、大阪市は昭和60年に難波宮跡史跡公園と大阪城公園を連続した歴史公園として整備しようという「難波宮跡・大坂城跡連続一体化構想」を打ち出した。

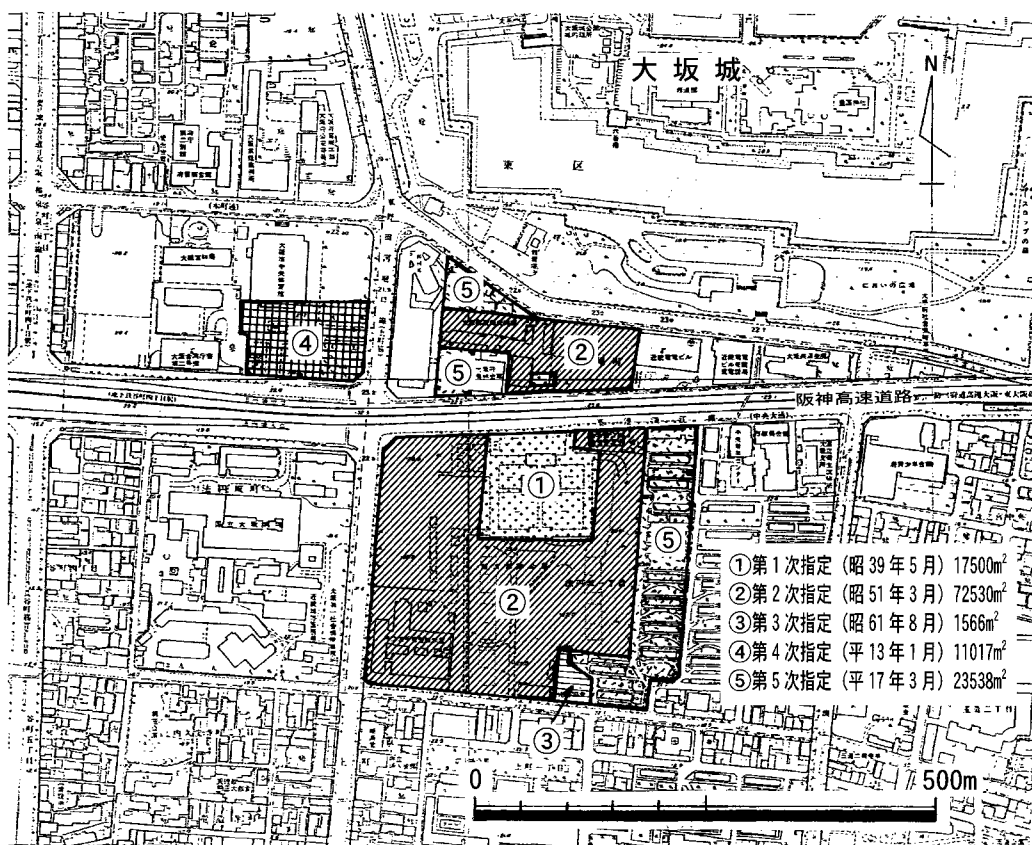


図4 難波宮跡の史跡整備

## V. 古代大坂南部の歴史的景観と保全

### (1) 摂津・河内の4古道（難波・八尾・長尾・竹ノ内）の関係とその測設年代

古代大坂の摂津国と河内国に位置し、相互に平行する八尾・長尾・竹ノ内の3古道は、秋山日出男、服部昌之、足利健亮らの研究<sup>24)</sup>により1町106mの整数倍できわめて計画的に測設された古道であることが明らかにされている。服部は上記の3古道と直交する難波大道にも注目し、これらの直線古道を基にして摂津・河内の直線国境が設定されたとし（図5のP-Q-R-S-T）、八尾街道を『日本書紀』雄略14年条に見られる磯齒津道に比定されるとも指摘する。

また、筆者も先の3氏の研究成果をさらに

発展させて、難波京が8坊16条と復原できることを前提として難波京と八尾街道との関係も106mの整数倍で理解できるとし、図5に示すように難波における京の建設に伴って広域にわたる都市計画として難波大道を含めた4古道が直線道路として整備されたと指摘した<sup>25)</sup>。ただし、これら4古道のうち発掘調査で道路遺構が検出されているのは難波大道のみである。以下に測設年代を推定する発掘調査の成果等を示しておく。

#### ① 難波大道

堺市の大和川今池遺跡（図5のU）で測溝心々間17～18mの直線道路跡が長さ360mにわたって検出され、その年代は幅0.7～1.5mの側溝内からの出土遺物から当初は7世紀中頃と推定されていた<sup>26)</sup>が、その後の発掘調

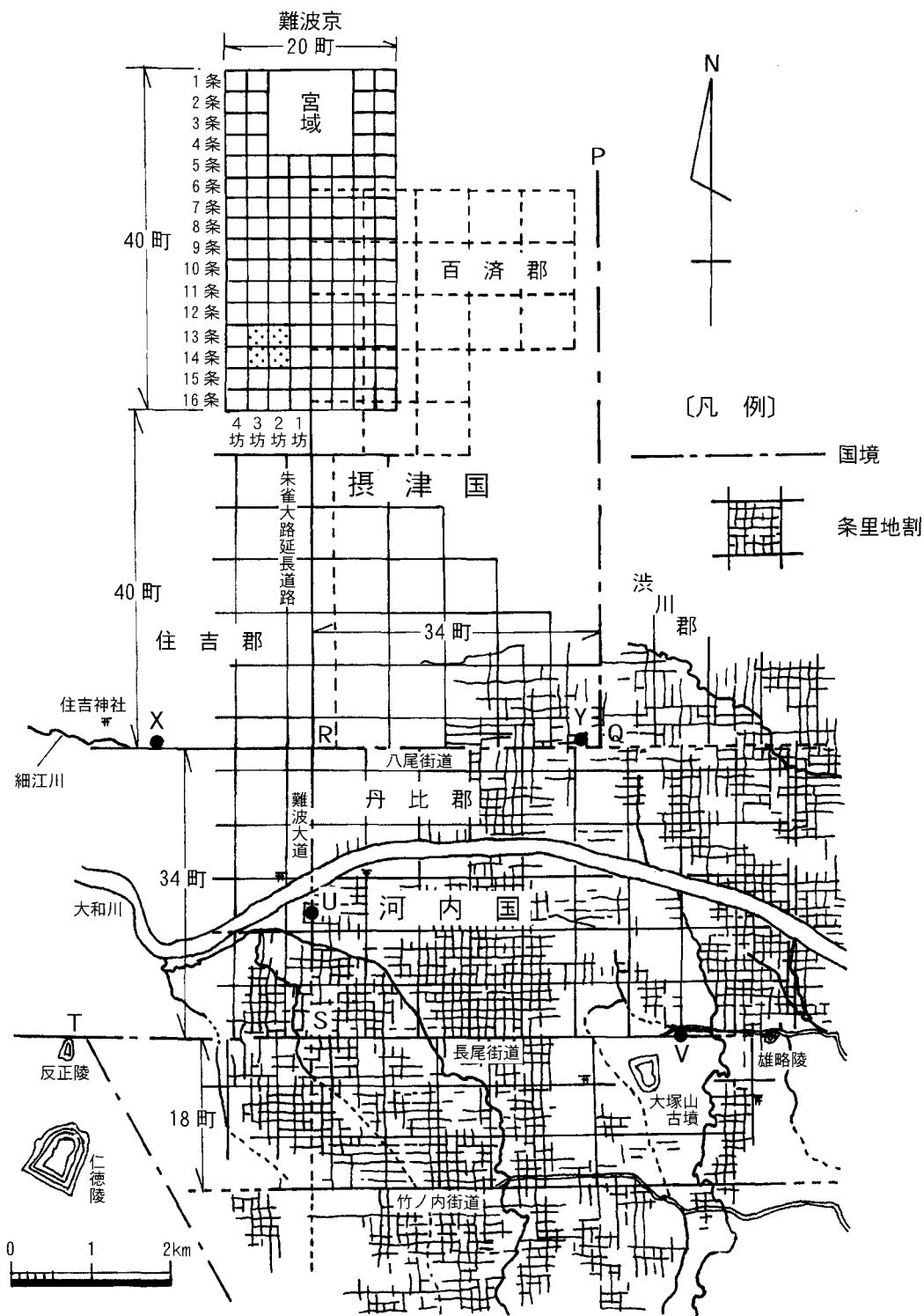


図5 難波京と摂津・河内の古道・条里

査では7世紀後半～8世紀前半の遺物が出土しており、その測設年代はやや新しくなりそうである。難波京域内の調査から見た京の造営開始年代が、7世紀末に近い天武期と考えられることからすれば、年代的には妥当かと思える。この道路を北に延長すると、難波京朱雀大路の延長道路とおおむね一致し、大和川の北側では部分的ではあるが、現在の大阪市住吉区と東住吉区の南北直線区界とも符合する。

## ② 八尾街道

大阪市住吉区の南住吉遺跡(図5のX)と同平野区の喜連東遺跡(図5のY)で、当該道路と平行する正方位の建物群で構成される7世紀末～8世紀代の集落が検出されている<sup>27)</sup>。当該直線道路の西端には国家鎮護の神、航海守護の神、武神を祀る住吉神社が位置し、その南を流れる細江川河口は、古墳時代に栄えた港である住吉津と推定されている。

この道路は、大阪市南部の東西の幹線道路である国道479号線として現在も機能している。

## ③ 長尾街道と竹ノ内街道

両道とも幹線道路ではないが、現在でも道路として利用され、河内国南部の歴史の道として大阪府教育委員会が昭和61年度から5カ年計画で実施した歴史の道調査報告書で報告されている<sup>28)</sup>。

長尾街道については、松原市大津道周辺遺跡(図5のV)で大津道北側溝と見られる溝(幅1～1.5m)が検出され、8世紀後半と推定され25mの道路幅が復原されている<sup>29)</sup>。しかし、図5に示した竹ノ内街道については、未だ道路関連遺構は検出されていない。近年急速な都市化の進展により失われつつあるが、図5からもわかるように難波大道・八尾街道・長尾街道・竹ノ内街道の周辺には条里地割が遺存する。足利健亮や金田章裕は、これら4古道が1町106mの整数倍の間隔を設

けて測設された後に、道路間を埋めるように条里地割の施行が行なわれたとする<sup>30)</sup>。また、この地域の条里地割の施行開始年代については、大阪市住吉区の南住吉遺跡・山之内遺跡・遠里小野遺跡(旧摂津国住吉郡)や同平野区の喜連東遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡・八尾南遺跡(旧河内国渋川郡・丹比郡)での7世紀代から8世紀代の建物の棟方位、区画溝や水田関連遺構などの検討によれば、8世紀の前半頃と考えられる<sup>31)</sup>。

## VI. おわりに

本稿では難波京と古代大坂平野を事例として、自然景観や歴史的景観の保全について述べて来た。近畿都市圏の中心である大阪市およびその周辺地域では、昭和40年代以降の急激な都市化により自然景観は著しく変貌し、都島区の毛馬閘門から中央区天満橋に至る旧淀川付近にかつての水域の面影を残す以外、古代の景観はほとんど遺存しないと言える。

歴史的景観についても、土佐堀川・堂島川として現在でも利用されている難波堀江、現在でも古代と同じ位置に建つ四天王寺や現在も道路として残る四天王寺周辺の難波京朱雀大路・条坊道路跡、八尾街道、長尾街道、竹ノ内街道などは、可視的な景観としてかろうじて残っている。しかし、古代の景観を構成した宮殿、寺院、掘り割、大部分の京内条坊道路などはビルや住宅の地下に埋蔵文化財として埋没し我々の目にふれることはない。

歴史的景観の保全という視点から埋蔵文化財を保存整備するためには、広域にわたる遺跡の買い上げや周辺地域の開発規制が必要となってくる。その典型的なものが、高松塚古墳の発見を契機として、歴史的風土を保存するために住民の理解と協力の下に国によって「古都保存法」や「歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法」が制定された明日香村の例である。難波宮跡も一連の保存運動によって史跡指定地の拡大と用地

の買い上げが進み12万m<sup>2</sup>が史跡指定地として開発から守られている。しかし、史跡指定地の外側は開発規制がないため、周囲は次々と建物の高層化が進行し、上町丘陵の高所に位置するにもかかわらず、宮跡から生駒山も見えない状況になっている。明日香や奈良市の平城宮と異なり、大都市大阪の中心にある遺跡の景観保全には限界があるように思える。(鳴門教育大学学校教育学部)

#### 〔付記〕

本研究には、平成17・18年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(C)「遺跡調査データによる微地形復原と考古資料を用いた律令期大坂平野の考古地理研究」(研究代表者:木原克司, 課題番号:17520521)を使用した。

#### 〔注〕

- 1) ①天坊幸彦『上代浪華の歴史地理学的研究』, 大八洲出版, 1926, 427頁。②竹山真次『難波古道の研究』, 湯川弘文社, 1935, 129頁。
- 2) ①岸 俊男「古道の歴史」『古代の日本』5, 角川書店, 1970, 93~107頁。②藤岡謙二郎「古代の難波京城を中心とした若干の歴史地理学的考察」『人文地理学論叢』, 柳原書店, 1971。③梶山彦太郎・市原実「大阪平野の発達史-14C年代データからみた-」, 地質学論集7, 1972, 101~112頁。④沢村仁「難波京について」『難波宮址の研究第六』, 1970, 1~12頁。⑤沢村仁「都城の変遷-古代の都市計画とその内容-」『古代史発掘 9』, 講談社, 1974, 90~92頁。⑥服部昌之「古代の直線国境について」, 歴史地理学紀要17, 1975, 5~29頁。⑦服部昌之「大阪平野低地古代景観の基礎的研究」『歴史地理研究と都市研究』上, 大明堂, 1978, 144~15頁。⑧足利健亮「難波京から有馬温泉を指した計画古道」『歴史地理研究と都市研究』上, 大明堂, 1978, 109~118頁。⑨足利健亮「大阪平野南部の古道について」, 人文28, 1982, 159~192頁。⑩長山雅一「前期難波宮と京の建設をめぐる」『難波宮と日本古代国家』, 塙書房, 1977, 79~134頁。⑪日下雅義「摂河泉における古代の港と背後の交通路について」, 古代学研究107, 1985, 1~13頁。⑫千田稔『埋れた港』, 学生社, 1974, 26~44頁・140~145頁。⑬金田章裕「長尾街道・竹ノ内街道の測設と条里プラン」『歴史の道調査報告書』3, 大阪府教育委員会, 1988, 41~54頁。⑭木原克司「難波京城の歴史地理学的考察」『難波宮址の研究 第七』論考編, (財)大阪市文化財協会, 1981, 105~136頁。⑮木原克司「微地形復原の方法と課題」, 歴史地理学18号, 1982, 14~26頁。⑯木原克司「我が国における条坊制都市の成立をめぐる-研究の現状と展望-」, 人文地理39-5, 1987, 34~54頁。⑰木原克司「難波宮発掘調査の現状と課題」, 歴史評論489, 14~28頁。
- 3) 日本建築学会近畿支部・土質工学会関西支部編『大阪地盤図』, コロナ社, 1966。土質工学会関西支部・関西地質調査事業会編『新編大阪地盤図』, コロナ社, 1987。
- 4) ①木原克司「古代難波地域周辺の景観復原に関する諸問題」, 大阪の歴史48, 1996, 1~25頁。②木原克司「微地形から見た古代難波地域に関する若干の考察」『アジアと大阪』, 古今書院, 1996, 16~32頁。
- 5) 千田稔は、安曇江をアドエと読み、明治21年内務省地理局発行の5000分の1大阪実測図の天満砂堆上に記載される小字アドエ付近(図3のオ)に位置比定するが、そのあたりは7~8世紀にはすでに陸化しており水域は存在しない。
- 6) 淀川本流のルートは、基本的には大阪平野基底面である洪積層上面の谷状地形を踏襲しており、その流路が守口付近や淡路付近で大きく蛇行するのは、吹田砂堆や天満砂堆の影響と考えられる。
- 7) 国書刊行会編『続々群書類従第三』, 続群書類従完成会, 1970, 428~437頁。
- 8) 新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史第一巻』, 大阪市, 1988, 62~65頁。
- 9) 前掲1) ①129~136頁。

- 10) 『難波宮址の研究 第11』, (財) 大阪市文化財協会, 2000, 247~252頁。
- 11) 木原克司「前期難波宮の宮域をめぐって」, 徳島地理学会論文集4, 2001, 155~164頁。
- 12) 中尾芳治「難波宮-研究状況と課題」, おうふう, 1997, 45~64頁。
- 13) 井上和人「古代都城制地割再考-藤原京・平城京を中心として-」, 研究論集VII, 奈良国立文化財研究所, 1984, 1~102頁。
- 14) 木原克司「難波京域の歴史地理学的考察」『難波宮址の研究 第七』論考編, (財) 大阪市文化財協会, 1981, 129~130頁。
- 15) 趙哲済「茶臼山古墳の発掘調査」, 葦火4, 1986, 2~6頁。
- 16) 積山洋「飛鳥時代の難波京をめぐって」『難波宮から大坂へ』, 和泉書院, 2006, 1~19頁。
- 17) 創建以来たびかさなる再建の歴史を経た中心伽藍は, 南大門・中門・塔・金堂・講堂が一直線に並び, 中門の左右から延びる回廊が講堂に連なる, いわゆる四天王寺式伽藍配置であり, 昭和30~32年の発掘調査によっても, 堂塔の位置は創建以来ほとんど変わらないことが明らかとなっている。現在の中心伽藍は, 昭和38年に旧位置に飛鳥様式で鉄筋コンクリートで復原されたものである。
- 18) 現国分寺境内や南側の国分町公園内からは奈良時代の蓮華文や唐草文の軒瓦などが出土している。しかし, 近年立派な門構えや塀が撤去され, 周囲は貸倉庫に変貌し, かつての面影はない。
- 19) 前掲2) ⑧116~117頁。
- 20) 前掲1) ①89~90頁。
- 21) 大谷治孝「摂津国家地売買公驗案の基礎的考察」, ヒストリア82, 1979, 12~30頁。
- 22) 松原弘宣『日本古代水上交通史の研究』, 吉川弘文館, 1985。榮原永遠男「難波堀江と難波市」『古代を考える難波』, 吉川弘文館, 1991, 201~232頁。
- 23) 中尾芳治「大阪アクロポリス計画-難波宮跡の保存と活用-」『論苑考古学』, 天山舎, 1993, 913~943頁。
- 24) 秋山日出男「日本古代の道路と一步の制」『檀原考古学研究所論集(創立35周年記念)』, 吉川弘文館, 1975, 543~582頁。前掲2) ⑥5~29頁, ⑨159~192頁。
- 25) 木原克司「摂津・河内の条里地割施行と直線古道」『大阪市文化財論集』, (財) 大阪市文化財協会, 1994, 217~260頁。図5の中で, 竹ノ内街道のルートについては秋山説ではなく足利説を採用した。
- 26) 『大和川・今池遺跡-第1地区発掘調査報告-』, 大和川・今池遺跡調査会, 1979。
- 27) 積山洋「南住吉遺跡で発見された7世紀の建物群について」, 葦火2, 1986, 4~5頁。京嶋覚・西畑佳恵・上野裕子「平野区喜連東遺跡の奈良時代建物群」, 葦火24, 1990, 2~3頁。
- 28) 「長尾街道・竹内街道」『近畿地方の歴史の道1 大阪1』, 海路書院, 477~579頁。
- 29) 森村健一「堺市発掘の難波大道と竹ノ内街道」, 季刊考古学46, 1994, 49~51頁。
- 30) 前掲2) ⑨159~192頁, ⑬41~54頁。
- 31) 前掲25) 251~255頁。

The Preservation of Landscapes around Ancient Capital City:  
A Case Study of Naniwa Capital Region and Ancient Osaka Plains

KIHARA Katsushi (Naruto University of Education)

**Key words:** Natural landscape, Historical landscape, Naniwa Capital Region, Regional-cultural heritage, Ancient Osaka Plains